挨　　拶

福島県高等学校教育研究会農業部会長
福島県立福島明成高等学校長　大和田　範雄

只今、ご紹介いただきました福島明成高校校長の大和田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日はあいにくの天候の中、東北６県４６校から約１８０名の先生方にご参加いただきまして誠に有り難うございました。また、大変お忙しい中を文部科学省の田端調査官を始め多くのご来賓の方々にご臨席を賜りまして本日のこの大会を開催できますこと我々大会を準備した者としては大変大きな喜びであります。有り難うございます。

さて、この大会でありますが、第５７回ということになっておりますが、これまでも色々と変遷を重ねて参りました。今回、特に校長協会の総会と同一の開催という新たな試みとなりました。これまでは、約１週間後に校長会を開催していたのですが、先生方が一同に介する機会、せっかくの機会であるので同一開催のほうがいいのではないかという意見がありまして、このような開催になった訳であります。

５７回といいますと第１回の開催は恐らくでありますが１９６０年の始めだったと思います。５７という回数からすると１９６２年からと思いますが、ちょうど私が生まれて間もない時でありました。この会場にいらっしゃる皆様の中にはその当時はまだこの世の中にお生まれでなかった人のほうが多いのではないかと思います。

１９６１年といいますとなんといいましても農業基本法の制定の年でありまして、そういった時に今後の農業教育をどの様に考えるかということで今大会が始まったのではないかと思います。農業構造改善、さらには選択的拡大、食料の安定供給、そういった大きな目標に向かって農業教育の果たすべき役割は何かということでこの大会が始まったと思います。その後、１９９９年には新たに食料・農業・農村基本法が制定され、農業基本法は廃止になりましたが、その際にも新たな農業の多面的機能の発揮、さらには農村の振興など、大きな目標が掲げられた訳であります。

その時代、その時代に農業教育の大きな役割をどのように果たしていくかということで熱心な研究協議が重ねられてきたと思います。今、この時代になりまして、農業生産工程の管理であるとか、さらには六次産業化ということで広く大きな流通、そういったものにどの様に対応しようか、さらには地域をどの様に考えて活動していこうかという新たな課題に立ち向かっている訳であります。そういった新たな課題に立ち向かい魅力ある産業である農業を今後我々がどのように伝えて行けばいいか、この２日間の間に是非、先生方にお考えいただきたいと思います。

今年３月に告示になりました新たな学習指導要領では社会に開かれた教育課程という言葉がキーワードになっております。是非、地元東北、さらには日本さらには目を広く向けて世界の農業を考えられることこそが社会に開かれた教育課程であると考えます。是非、各学校での課題等を共有していただきたいと思います。

結びになりますが、今回、先程も申し上げましたが校長会との同一開催ということで会津農林高校が中心となって本県全職員をあげて準備に取り組んできたところでありますが、行き届かないところがあるかもしれません。どうぞ、ご容赦をいただきまして、もし何かありましたら事務局のものに申しつけいただければと思います。どうぞ、２日間よろしくお願いいたします。

挨　　拶

全国農業高等学校長協会東北支部長
山形県立村山産業高等学校長　槇　誠司

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介ありました山形県立村山産業高等学校長の槇と申します。支部長として今年１年この役を仰せつかりました。どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、私は今日雨の中ですが車で来ました。思うと７月５日以降、活発な梅雨前線により大雨が断続的に降り続く時期もありましたし、度重なる台風等で大雨により川の氾濫、そして土砂災害等で尊い生命を失われた方に心からご冥福を申し上げるとともに、今も各地域で被災されている皆様方に心よりお見舞い申し上げます。

さて、本大会は先程大会会長からありましたとおり３つの団体が１つになって初めて行われる大切な大会であります。この大会が、福島県を開催地とし、この素晴らしい会場で行われることをとても嬉しく思っております。今日は８月１６日という大切なお盆の送り日に、こうした会議が行われること、本当に申し訳ないという気持ちであります。このような素晴らしい大会運営に当たってくださった福島の農業関係各位の皆さんは、きっとお盆の期間中、家庭を顧みずに一生懸命この会場を作っていただいたのだろうと察すれば、感謝に尽きます。本当にご苦労様でございます。また本大会におかれましては、田畑調査官、そして大沼教育次長、そして福島理事長、大変お忙しいところ参加してくださいましてありがとうございます。本大会は１６日から２日間に渡り行われますが、できるだけこうした大切な大会を、私たち校長会も十分な配慮をしなければならないとつくづく思っております。来年の本大会は８日、９日を予定しているところでございます。

さて、先程大会会長からありましたうように、本大会の趣旨は、いま目の前にいる子供たちが果たして３０年先を見据えた農業教育のあり方はどういうものなのか。今、生産年齢である３７歳から４５歳、４６歳のそうした年齢層が３０年後になりますと生産年齢の人口が半分になる。そうした著しい少子化を目の前にして、本来の農業教育のあり方はどうあるべきか、真剣に考えなければならない時代に来ていると思うのです。過去を振り返らず、これから先、確かな農業教育とはどのようなものなのだろうか。私は農業の専門家ではございません。だからこそ、校長という立場でもう６年になりますが、いろんなところを見させていただいた中で、農業教育は本当に素晴らしく、歴史も深く、そして日本の経済をしっかりと芯のあるものとして、農業教育は常々大切であると肌で感じております。だからこそ、これから先の子供たちにどのような農業教育が必要なのか。ひとつひとつ精査し、本当に必要なものと、そうでないものをしっかりと私たちは見極めていくことが必要であります。

来年は山形が主会場として、福島・宮城・山形の三県で農業クラブ全国大会が開催されます。山形は小さな県で、農業を抱えている学校数は５校しかございません。そうした少ない人数で両県としっかり連携し、どこにも負けない素晴らしい大会にしようとういう強い連帯感と志をもって取り組んでいるところであります。そして、これから先もこうした素晴らしい農業クラブは永遠に続くことを我々は期待し、願っているわけです。だからこそ、こうした一つひとつが、何が必要かとか、平板測量競技は、本当にいまの時代にふさわしいのか、もう時代遅れなのだろうか。だったら、これから先はどんな競技を新しく考え、時代にふさわしい競技は何なのか。不必要なものは何なのか。より選び、そして３０年先に農業教育がしっかりと子供たちに根付いている、そうした教育を誰がするのか。それは、ここにいる皆さんそのものではないかと、常々思っております。

私たちは目の前にいる子供たちにしっかりと寄り添いながら、農業教育ができるために必要なもの、それは何なのか真剣に語ることが本大会の大きな役割ではないでしょうか。どうぞ、この２日間そうした意味では充実した２日になることを私からお願い申し上げまして、私からの挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

挨　　拶

全国高等学校農場協会東北支部長
山形県立村山産業高等学校農場長　後藤　弥生

今年度、全国高等学校農場協会東北支部長を仰せつかりました、山形県立村山産業高等学校の後藤弥生と申します。よろしくお願い申し上げます。本大会の開催にあたり、農場協会東北支部役員を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

ご来賓の皆様方には、公務ご多用のところご臨席を賜り、厚く御礼を申し上げます。また、準備万端整えてくださいました大会会長の福島県立福島明成高等学校大和田校長先生、大会事務局長の佐藤校長先生をはじめとする福島県立会津農林高等学校の諸先生方、ご協力をいただきました福島県内の諸先生方に心から感謝を申し上げます。

東日本大地震から７年が経過した現在も、約６万人の方々が未だに避難生活を送られているということお聞きしております。被災地の農業高校におかれましては、様々な苦難があったことと思いますが、宮城県農業高校では４月から新転地での学校生活が始まったということです。１週間後に迫った第６９回日本学校農業クラブ東北連盟大会の意見発表会場となるわけですが、生徒たちの元気な姿が見られることを楽しみにしています。

さて、今年６月の全国高等学校農場協会全国大会において、青森県立五所川原農林高等学校の三上浩樹先生から、GLOBAL G.A.P.認証と森林経営の国際的な認証であるFSCの取り組みについて発表いただきました。発表後の協議会では、校内組織や指導体制に関する質疑がなされ、認証取得に向けた取り組みが全国的に広がっていることを実感しました。しかしながら、直前に行われたGAP教育を推進する上での緊急調査では、費用面だけでなく、人的・物的課題を数多くの学校が抱えていることも事実であります。協議会後、本日ご臨席の文部科学省初等中等教育局児童生徒課産業教育振興室教科調査官、国立教育政策教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官　田畑淳一先生からいただいた指導講評では、「GAP教育で目指すものは農業教育の質の“見える化”（安全・安心な農業教育の展開）であり、GAPやHACCPは今後のスタンダードになる。」と示唆されると同時に、「取り組みを通して生徒が変容することが大事であり、手段の１つとして考えて欲しい。」とも述べられました。このことから、学習の主体が生徒たちであることを改めて認識するとともに、各学校の育てる生徒像を念頭に置いた上で、国際認証教育をはじめとする様々な学習への取り組みがなされるべきではないかと考えます。

本研究大会から３つの分科会で研究協議が行われます。分科会の視点には国際認証を取り入れた農業教育の実践も含まれており、各学校における様々な課題を解決するためのヒントが随所にあるものと思っております。皆様一人ひとりが所属する学校の問題点に目を向け、改善への第一歩として意見交換や情報交換を行っていただきますようお願いを申し上げ、挨拶といたします。

祝　　辞

福島県教育委員会教育長　鈴木淳一
（理事兼教育次長　大沼博文）

皆さんこんにちは、私は県の教育次長をしております大沼博文と申します。鈴木淳一教育長に代わりましてご挨拶を申し上げます。

本日、東北各県において農業教育に日々ご尽力をいただいております皆様方をお迎えしこのように盛大に大会が開催されますこと、心からお祝いを申し上げます。また、本大会が長年に渡り会員相互の研究、修養の場として開催され東北地区の農業教育の充実発展に寄与してこられましたことに心から敬意を表したいと存じます。

さて、私たちはロボットや人工知能さらにはビッグデータ等の先端技術を活用し新たな価値を創造しようとする社会、いわゆるsociety5.0(ソサエティ５．０)を迎えようとしております。この点に伴い教育界においては、高等学校学習指導要領の改訂や高大接続改革など大きな変革期を迎えているところでありますが、農業教育におきましても、時代の変化に対応した望ましい農業経営の在り方として GAP を普及させる動きが全国的に進められております。今ほど副会長からもお話がありましたとおり、青森県立五所川原農林高等学校が全国に先駆けてGLOBAL G.A.P.認証の取得に取り組まれましたことは、本県はもとより全国の農業高校にとって大きな刺激となったところであります。本県においても GAP 認証取得に取り組む県内の農業高等学校と全国の農業高等学校６校との交流事業を進めているほか、国家プロジェクトとして本格的に動き出した福島イノベーション・コースト構想を担う産業人材の育成を図るため、先進的な技術や技能の習得に向けて企業や研究機関との連携を深めているところでございます。

農業教育を通じて、地域を支える人間性豊かな職業人を育成するという使命の実現のためには、皆様の情熱と高い専門性が必要不可欠であることは言うまでもありません。

本日、この様に東北六県の高等学校で農業教育に携わる皆様が一同に介して、日頃の研究や実践について発表し、当面する農業教育に関する諸課題について協議されますことは、誠に意義深いものであると考えております。

２日間にわたる研究協議が実りあるものとなりますことをご期待申し上げますと共に、全国農業高等学校長協会東北支部並びに全国高等学校農場協会東北支部の益々のご発展と、お集まりの皆様の一層のご活躍を祈念してお祝いの言葉といたします。本日は誠におめでとうございます。

祝　　辞

全国農業高等学校長協会理事長
群馬県立勢多農林高等学校長　福島　実

皆さんこんにちは、只今ご紹介頂ました全国農業高等学校長協会の理事長をしております福島と申します。所属は群馬県立勢多農林高校の校長をしております。よろしくお願いいたします。

まず最初に先程来話がございますように、今年は猛暑の後に豪雨ということで今朝も東北４県に土砂災害警戒情報が出ているという状況で、先生方も苦労されて来られた方もいらっしゃるのではないかと思っております。大きな被害がなければよろしいかなと思っております。８月上旬に発生しました西日本豪雨災害によってお亡くなりになった方々、甚大な被害を受けられた皆様にお悔やみとお見舞いを申し上げます。また、一日も早い復旧復興を心よりお祈り申し上げます。また、東日本大震災から７年以上が経過いたしまして並々ならぬご努力で復興を進められている皆様に心より敬意を表するものであります。

本日は、平成３０年度全国農業高等学校長協会東北支部総会並びに研究協議会及び第１６回全国高等学校農場協会東北支部大会の開催誠におめでとうございます。先程、大会会長様、支部長先生からありましたように校長協会の支部大会と農場協会の支部大会の同時開催の初年度ということで全国の動きを受けての取り組みに深く感謝申し上げます。

昨年度は全国産業教育フェア秋田大会が開催されまして、種苗交換会という素晴らしい伝統的な行事に参加でき、大変私も感動いたしました。

さらに、先程話がございましたが、来年はいよいよ平成３１年度農業クラブ全国大会南東北大会ということであります。山形県を中心に宮城、福島の三県の先生方は準備を進めていただいているところでありますが、大変お世話になりますがよろしくお願いしたいと思います。

また、このところテレビ中継もされていますが、秋田県代表で金足農業高校が甲子園出場で三回戦進出ということで誠におめでとうございます。秋田県の代表ではありますけれども、全国の農業関係高校３６５校の代表ということで、是非、この後の活躍をご期待申し上げます。

また、今年度の支部大会は「ならぬものはならぬ」の什の掟と、八重の桜でも舞台となった会津の地がある福島県、そして、農業の盛んである福島県の中心の市である福島市で支部大会が開催できることは誠に喜ばしい限りでございます。これまで準備を進めていただきました事務局関係各位の皆様に心より御礼申し上げます。

さて、私の方から若干お時間をいただきまして、情勢報告も含めまして挨拶をさせていただければと思っております。

全国農業高等学校長協会は、戦後新制高等学校制度の発足と同時に昭和２３年５月に結成され、今年度は７０年の節目を迎えております。戦後の食糧難の時代から高度経済成長期、そして現在に至るまで、我が国の農業や地域社会、地域産業を支える有為な人材を育成してきたその役目は大変大きなものがあります。農業教育の振興にご尽力された東北支部の諸先輩の先生方、並びに関係者の皆様にこの場を借りて深く敬意を表する次第でございます。

我が国の農業や農村を取り巻く状況は、農業就業人口減少とともに就業者の高齢化や耕作放棄地の増加など厳しさを増しています。しかしながら、安全安心な食料の安定的な供給や、地域経済を支え国土環境保全や景観形成等の多面的な機能を有する農業・農村の役割は大変重要であることは言うまでもございません。

一方、農業の六次産業化やグローバル化の進展と共にICTやAI等の目まぐるしい発展は、農業の分野においても革新的な変化をもたらす可能性があります。特に農業を中心に健康、福祉、医療、環境エネルギー、観光スポーツなど関連産業との結びつきがこれまで以上に強くなり、持続可能な世界や地域社会の実現に必要な基盤産業としての農業の役割が今後、大いに求められる時代となってきていると考えております。

従いましてグローバル社会に対応し、地方創世や成長産業としての農業を担い、持続可能な社会作りに貢献できる人材の育成を、農業関係高校が拠点となって進めていくことが必要であるというふうに考えております。

全国農業高等学校長協会ではこのような視点を踏まえ、昨年３月に第３次アクションプランを策定し「グローカル・アグリハイスクール宣言」いわば世界規模で考え、足元から行動する農業高校宣言を行いました。５つの基本方針と１０の行動計画を提示させていただきました。本日参加されております先生方におかれましては、このプランを踏まえ各県各学校の実情に応じたアクションプランを作成いただき、その実現に向けて農業教育の実践を積み重ねていただいていることと思います。農場協会といたしましても、アクションプランの実施状況について調査をさせていただいているところでございますが、今後その結果がまとまり次第また報告させていただきたいと考えておりますので、引き続きよろしくお願いしたいと思います。

また、新高等学校指導要領が３月に告示されました。農業教育においては主体的、対話的で深い学び、これを実践する効果的な学習法であるプロジェクト学習の重要性が示されました。課題解決力を育て、農業各分野の実践力を育成する重要な学習法であり、各科目との系統的な指導展開がなされるよう、校長協会としても推進していきたいと考えております。

さらに、生徒の学習意欲を喚起し、農業教育の質の確保、向上を目指す一環としてのアグリマイスター顕彰制度では、昨年は当初目標を超える１，３２７名の生徒を顕彰することができました。本年も７月１８日に前期の申請を締め切りさせていただきましたが、エントリー数は２２１名です。８月２０日頃には認定証を送付できるよう現在準備を進めております。今後の後期申請も併せて先生方にはよろしくお願いいたします。

また、昨年度より推進しております、先程より話がございましたが、GAP、HACCP等の教育につきましては、農業を学ぶ全ての生徒に工程管理の基本的な考え方を学習させることをベースとして、認証の取得については各都道府県各学校の実情に応じて取り組みましょうということで進めております。お陰様で、五所川原農林のGLOBAL G.A.P.を皮切りに６月現在で全国農業関係高校２２校でGLOBAL、ASIA、J GAP のいずれかを認証取得しているということでございます。これは農水省の調査のまとめであります。２０２０年の東京オリンピック、パラリンピック選手村への食材供給を我々農業関係高校から行うことができればと考えております。

また、農業教員研究組織の改善として再編整備されました全国高等学校農業教育研究協議会につきましては、「生産系」、「環境系」、「資源活用系」の３部会の開催に移行して３年目となりました。今年度は「生産系」部会が宮城、「環境系」部会が奈良、そして「資源活用系」部会が神奈川で開催され充実した研究協議会になりました。関係者の皆様に感謝申し上げると共に、参加した先生方の各県での伝達講習がスムーズになされるようよろしくお願いいたします。なお、昨年度の校長協会の秋季総会時に提案させていただきましたが、平成３４年度を最後にこの３部会の夏の大会を原則として中止させていただきまして、校長協会と農場協会の各支部大会、本日行われている各支部大会にその機能を入れると共に、１２月に開催されます農場協会の農業教育研究協議会と、校長協会の役員会の同時開催に併せて、３部会を分科会形式で大会時に開催する方向で検討を進めさせていただいております。課題を解決しながらソフトランディングできるよう、各支部及び研究協議会３部会の先生方中心にご対応をよろしくお願い申し上げます。

また、昨年度から全国農業校長会に設置しております、地域連携相談窓口を通した各種企業との連携につきましては、ICTを活用したスマート農業分野での連携をスタートさせていただいております。先生方には急な通知やお願いが多くて大変恐縮ではありますが、各校の農業教育が一層充実できるような良い形で進められればと考えておりますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。以上挨拶に併せまして情勢報告もさせていただきました。

結びに、東北支部の農業関係高校のご発展と、この後行われます研究協議会が有意義なものとなりますことを祈念いたしましてお祝いの言葉とさせていただきます。よろしくお願いいたします。